

# 月夜と眼鏡

小川未明

青空文庫



町も、野も、いたるところ、緑の葉に包まれているころでありました。

おだやかな、月のいい晩のことであります。静かな町のはずれにおばあさんは住んでいましたが、おばあさんは、ただ一人、窓の下にすわって、針仕事をしていました。

ランプの灯が、あたりを平和に照らしていました。おばあさんは、もういい年でありましたから、目がかすんで、針のめどによく糸が通らないので、ランプの灯に、いくたびも、すかしてながめたり、また、しわのよった指さきで、細い糸をよったりしていました。

つきひかり  
月の光は、うす青く、この世界を照らしていました。なまあた  
みずなか  
たかな水の中に、木立ちも、家も、丘も、みんな浸されたようであ  
いえおか  
ります。おばあさんは、こうして仕事をしながら、自分の若い時  
しごと  
ぶん  
分のことや、また、遠方の親戚のことや、離れて暮らしてい  
えんぼう  
る孫娘のことなどを、空想していたのであります。  
くうそう  
め  
目ざまし時計の音が、カタ、コト、カタ、コトとたなの上で刻  
どけい  
んでいる音がするばかりで、あたりはしんと静まっています。  
おと  
ときどき町の人通りのたくさんな、にぎやかな巷の方から、な  
まちひととお  
にか物売りの声や、また、汽車のゆく音のような、かすかなとど  
ものうこえ  
ろきが聞こえてくるばかりであります。

おばあさんは、いま自分はどこにどうしているのすら、思い出

せないように、ぼんやりとして、夢を見るような穏やかな気持ちですわっていました。

このとき、外の戸をコト、コトたたく音がしました。おばあさんは、だいぶ遠くなった耳を、その音のする方にかたむけました。いま時分、だれもたずねてくるはずがないからです。きつとこれは、風の音だろうと思いました。風は、こうして、あてもなく野原や、町を通るのであります。

すると、今度、すぐ窓の下に、小さな足音がしました。おばあさんは、いつもに似ず、それをききつけました。

「おばあさん、おばあさん。」と、だれか呼ぶのであります。

おばあさんは、最初は、自分の耳のせいでないかと思いまし

た。そして、手を動かすのをやめていました。

「おばあさん、窓を開けてください。」と、また、だれかいいました。

おばあさんは、だれが、そういうのだらうと思つて、立つて、窓の戸を開けました。外は、青白い月の光が、あたりを昼間のように、明るく照らしているのであります。

窓の下には、脊のあまり高くない男が立つて、上を向いていました。男は、黒い眼鏡をかけて、ひげがありました。

「私は、おまえさんを知らないが、だれですか？」と、おばあさんはいいました。

おばあさんは、見知らない男の顔を見て、この人はどこか家

まちがえてたずねてきたのではないかと思ひました。

「私は、眼鏡売りです。いろいろな眼鏡をたくさん持っています。

この町へは、はじめてですが、じつに気持ちのいいきれいな町です。今夜は月がいいから、こうして売って歩くのです。」と、その男はいいました。

おばあさんは、目がかすんでよく針のめどに、糸が通らないで困っていたやさきでありましたから、

「私の目に合うような、よく見える眼鏡はありますかい。」と、おばあさんはたずねました。

男は手にぶらさげていた箱のふたを開きました。そして、その中から、おばあさんに向くような眼鏡をよつていましたが、やが

て、一つのべっこうぶちの大きな眼鏡を取り出して、これを窓から顔を出したおばあさんの手に渡しました。

「これなら、なんでもよく見えること請け合いです。」と、男はいいました。

まどしたおとこ  
窓の下の男が立っている足もとの地面には、白や、紅や、青や、  
いろいろの草花が、月の光を受けてくろずんで咲いて、香つて  
いました。

おばあさんは、この眼鏡をかけてみました。そして、あちらの目ざまし時計の数字や、暦の字などを読んでみましたが、一字、一字がはつきりとわかるのでした。それは、ちょうど幾十年前の娘の時分には、おそらく、こんなになんでも、はつきりと目に



映つたのであろうと、おばあさんに思われたほどです。

おばあさんは、大喜びでありました。

「あ、これをおくれ。」といつて、さつそく、おばあさんは、この眼鏡を買いました。

おばあさんが、錢を渡すと、黒い眼鏡をかけた、ひげのある眼鏡売りの男は、立ち去つてしまいました。男の姿が見えなくなつたときには、草花だけが、やはりもとのように、夜の空気の中に香つていました。

おばあさんは、窓を閉めて、また、もとのところにすわりました。こんどは楽々と針のめどに糸を通すことができました。おばあさんは、眼鏡をかけたり、はずしたりしました。ちようど子

供どものように珍めづらしくて、いろいろにしてみたかつたのと、もう一つは、ふだんかけつけないのに、急きゆうに眼鏡めがねをかけて、ようすが変かわつたからでありました。

おばあさんは、かけていた眼鏡めがねを、またはずしました。それなたなの上うへの目めざまし時計どけいのそばにのせて、もう時刻じこくもだいぶ遅おそいから休やすもうと、仕事しごとを片かたづけにかかりました。

このとき、また外そとの戸とをトン、トンとたたくものがありました。おばあさんは、耳みみを傾かたむけました。

「なんとという不思議ふしぎな晩ばんだろう。また、だれかきたようだ。もう、こんなにおそいのに……。」  
と、おばあさんはいつて、時計どけいを見みますと、外そとは月の光つきひかりに明あかるい

けれど、時刻はもうだいぶ更けていました。

おばあさんは立ち上がって、入り口の方にゆきました。小さな手でたたくと見えて、トン、トンというかわいらしい音がしていたのであります。

「こんなにおそくなつてから……。」と、おばあさんは口のうちでいいながら戸を開けてみました。するとそこには、十二、三の美しい女の子が目目をうるませて立っていました。

「どこの子か知らないが、どうしてこんなにおそくたずねてきましたか？」と、おばあさんは、いぶかしがりながら問いました。

「私は、町の香水製造場に雇われています。毎日、毎日、白ばらの花から取った香水をびんに詰めています。そし

て、夜、おそく家に帰ります。今夜も働いて、独りぶらぶら月が  
 いいので歩いてきますと、石につまずいて、指をこんなに傷つけ  
 てしまいました。私は、痛くて、痛くて我慢ができません。  
 血が出てとまりません。もう、どの家もみんな眠ってしまいまし  
 た。この家の前を通ると、まだおばあさんが起きておいでなさい  
 ます。私は、おばあさんがごしんせつな、やさしい、いい方だと  
 いうことを知っています。それでつい、戸をたたく気になったの  
 であります。「と、髪の毛の長い、美しい少女はいました。  
 おばあさんは、いい香水の匂いが、少女の体にしみてい  
 るとみえて、こうして話している間に、ぶんぶん鼻にくるのを  
 感じました。

「そんなら、おまえは、私を知っているのですか。」と、おばあさんはたずねました。

「私は、この家の前をこれまでたびたび通つて、おばあさんが、窓の下で針仕事をなさっているのを見て知つています。」と、少女は答えました。

「まあ、それはいい子だ。どれ、その怪我をした指を、私にお見せなさい。なにか薬をつけてあげよう。」と、おばあさんはいいました。そして、少女をランプの近くまで連れてきました。少女は、かわいらしい指を出して見せました。すると、真つ白な指から赤い血が流れていました。

「あ、かわいいそうに、石ですりむいて切つたのだろう。」と、お

ばあさんは、口のうちでいいましたが、目がかすんで、どこから血が出るのかよくわかりませんでした。

「さっきの眼鏡はどこへいった。」と、おばあさんは、たなの上を探しました。眼鏡は、目ざまし時計のそばにあつたので、さつそく、それをかけて、よく少女の傷口を、見てやろうと思いました。

おばあさんは、眼鏡をかけて、この美しい、たびたび自分の家の前を通つたという娘の顔を、よく見ようとしました。すると、おばあさんはたまげてしまいました。それは、娘ではなくて、きれいな一つのこちようでありました。おばあさんは、こんな穏やかな月夜の晩には、よくこちようが人間に化けて、夜おそくま

で起きている家を、たずねることがあるものだという話を思い出しました。そのこちようは足を傷めていたのです。

「いい子だから、こちらへおいで。」と、おばあさんはやさしくいいました。そして、おばあさんは先に立って、戸口から出て裏の花園の方へとまわりました。少女は黙って、おばあさんの後についてゆきました。

花園には、いろいろの花が、いまを盛りと咲いていました。昼間は、そこに、ちようや、みつばちが集まっていて、にぎやかでありましたけれど、いまは、葉蔭で楽しい夢を見ながら休んでいるとみえて、まったく静かでした。ただ水のように月の青白い光が流れていました。あちらの垣根には、白い野ばらの花が、

こんもりと固<sup>かた</sup>まつて、雪<sup>ゆき</sup>のように咲<sup>さ</sup>いています。

「娘<sup>むすめ</sup>はどこへいった？」と、おばあさんは、ふいに立<sup>た</sup>ち止<sup>ど</sup>まつて

振り向<sup>む</sup>きました。後<sup>あと</sup>からついてきた少<sup>し</sup>女<sup>ようじよ</sup>は、いつのまにか、どこ

へ姿<sup>すがた</sup>を消<sup>け</sup>したもののか、足<sup>あし</sup>音<sup>おと</sup>もなく見<sup>み</sup>えなくなつてしまいました。

「みんなお休<sup>やす</sup>み、どれ私<sup>わたし</sup>も寝<sup>ね</sup>よう。」と、おばあさんはいつて、

家<sup>いえ</sup>の中<sup>なか</sup>へ入<sup>はい</sup>つてゆきました。

ほんとうに、いい月<sup>つき</sup>夜<sup>よ</sup>でした。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「赤い鳥」

1922（大正11）年7月

※表題は底本では、「月夜《つきよ》と眼鏡《めがね》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 月夜と眼鏡

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>